楽園に送られた俺はとりあえず勇者をやってみた

バカ夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
楽園に送られた俺はとりあえず勇者をやってみた

【Ｎコード】
Ｎ４４０６Ｗ

【作者名】
バカ夜空

【あらすじ】
茶髪で目立ち、尚且つ天才な主人公。
友達に薦められて好きになったパソコンゲームで、新発売されたカセットを買いに行き、その帰り道で我慢できなくなった主人公は開封し説明書を見た。
すると最後のページが貼り付けられており、それをはがすと……。

俺は楽園にやってきた

俺は薄暗い部屋で目覚めた。

「いててて……」

頭を軽く打ったようで、少しクラクラする。

それもすぐに回復してくれたので、辺りを見回した。辺りは暗くて何も見えないほどだが、足元が軽く見えたから、目を凝らして床を覗き込んだ。

足元の床には爪と同じくらいの大きさで、字がズラリと並んでいる。不気味に思うくらいびっしりと。

「床は石碑か？　字は漢字……いや、古代文字、昔の文明で使われていた文字かな」

そこに書かれていたのは高校生になったばかりの俺が習っていない文字ばかりだった。

しかし、俺は中学の時こんな字を歴史の教科書で見たことがある。

「確か……漢字の元になった甲骨文字だったかな？　……でも微妙に違う気がする」

甲骨文字なら、中学生の時に暇だったので解読したことがあるから、頑張れば読めるだろう。

でも、今はそんなことをしている場合ではないな。ここに書かれた文字をすべて解読するには時間がかかりすぎる。

「俺はなにをしていたんだろう……」

まずはそこが大事なことだな。

気を失うまでの記憶を思い出してみる。

「そうだ！　俺は今日発売になったパソコンの楽園（ヘブン）って言うゲームを買いに、修人（しゅうと）とアオイ電化に行って、その帰りだったはずだ！」

八割程度は思い出した。

まず、実を言うと俺こと瀬川優斗（せがわ ゆうと）はかなりのゲーマーだった。オタクではないぞ。

小学生の頃は、運動好きで勉強もかなり出来ていた方だが、中学に入りスポーツはどれも簡単すぎてすぐ飽きてしまい、勉強も毎回満点近くを取ってしまいつまらなくなったのだ。
中学に上がると小学生時代のちやほやはなくなり、完全に俺は天才として周りから見られていた。さらに、髪の毛が茶髪ということで喧嘩をふっかけられてばかりだったので友達もろくにいなかった。
そんな俺に話しかけてきた男が、一緒に『楽園』を買いに行った新庄修人だ。
修人は完全に『オタク』と言っていいほどで、普通なら天才の俺と絡むのもおかしいのだが、何故かやたらと俺に絡んできて、ぱそこんげーむと呼ばれているものを進めてきた。
断る理由も特になかったので仕方なくパソコン研究部に行って、パソコンを貸してもらい、そのげーむをプレイしてみた。
最初は適当にしていたが、すぐにそのげーむにはまってしまい、一日もかからずクリアしてしまったほどだ。
俺も修人と同じでバカだったんだろうな。今ではよく断らなかったなと思う。
話がそれたが、その後は……その帰り道で我慢できなかった俺と修人は開封して説明書を読んでいた。
最後のページがノリみたいなもので貼り付けられていたから、中を見るために剥がしたはずだ。
そこで俺の記憶は途切れた。
「……って百パーセントその説明書に貼り付けられていた最後のページのせいだろ！！」
怪しいとは思ってたんだ。新品を購入したのに説明書が貼り付けられているはずがないからな。それがもし欠陥品ならわかるけど。
「ＥＩは壊れてないかな」
俺は右の袖を肘まで捲る。そこには小型の機械端末、ＥＩがついていた。
ＥＩとは略称であり、本当はエレクトロン・インフォメーション

と言い、電子情報と呼ばれる機械端末だ。
名前の通り、膨大な量の情報をこの端末一つでほとんど見ることができる。国家機密や個人情報などはブロックされる場合が多い。
簡単に言えば、パソコンを小さくしてブレスレットにしたものだと思ってくれたら想像できるだろう。
大抵の人はどちらかの腕に装着するブレスレットみたいなもので、俺も右腕に着けている。
どうでもいいことだが、これはずっと操作をしている時に、着けている方の腕が吊りそうになるから、空中での使用はあまりしたくない。
しかし、そんなことも言ってられないので、空中で腕を平にしたままピッ、ピッと左手で軽く操作してみた。
「良かった、壊れてないみたいだ」
不幸中の幸いか、ＥＩは壊れていなかった。
これには位置情報をどこにいても強い電波で受信するという優れた機能もついている。その機能を使えば、俺の現在地がわかるはずだ。
再びＥＩを操作して、位置情報がわかる画面までしたのだがそこに映し出されたのは、
「受信不可能（エラー）？」
画面いっぱいという大きなエラーの三文字だった。
おかしい。いや、普通のＥＩなら特別おかしなことはない。稀にたくさんの人が同時に同じ操作をすれば、一度エラーと出ることもある。
だが、俺の所有しているものは改造を施してあって必ずエラーが表示されることはないのだ。
何度やってみてもエラーとしか出てこない。これは故障（バグ）かもしれないな。
「ようこそ、楽園（ヘブン）の世界へ」
俺がＥＩの故障を直していると、突然背後から声をかけられた。

敵か？　俺はゆっくりと振り向きながら戦闘態勢にはいった。
「身構えなくても大丈夫ですよ。それにしても今の反応……やはり逸材ですね」
暗さで顔が見えないが、声の高さからして女だろう。
「お前誰だ？」
「私（わたくし）はこちらの案内娘でございます」
彼女が自己紹介するのと同時にボッと明かりがついた。その光はライトや提灯などではない。炎だ。彼女の手の上に火の球が出来ている。
俺はさらに警戒心を強めた。この女なかなかできるぞ。
明かりがついたことによって彼女の容姿が見えてきた。顔は幼く背がかなり小さいので年齢は俺より年下だろう。口調から想像していた人とは正反対だ。
……警戒する必要あるか？
「大丈夫です。私は戦闘用の人間ではないので安心してください」
「……わかった。後、知り合ったばっかだけど、いくつか質問していいか？」
「えぇ、私に答えられるのならいいですよ」
「まず、ここがどこか知ってるか？　俺のＥＩで位置情報がつかめないんだが……。それと俺がなんでここにいるか知らないか？」
彼女は持ってきていたろうそくに作り出した火を灯して語りだした。
「ここは楽園（ヘブン）といい、あなたが住んでいた『地球』とは別の空間です」
そこで一度言葉をきり、今度はさっきよりゆっくり言い放った。
「そしてあなたは楽園のたった一人のプレーヤーに選ばれました」

俺は勇者になってみた

「そしてあなたは楽園のたった一人のプレーヤーに選ばれました」
彼女の透き通った声がドアも窓もないこの部屋に響き渡る。
「プレーヤーってどういうことだよ」
「あなたはこのゲームの主人公になってもらいます」
「なんで俺なんだ？」
「なんででしょうね？」
疑問視で尋ねたのに疑問視で返された。
それよりお前も知らないのかよ！！
「……話を進めますが、職業は何にしますか？」
「なにがあるんだ？」
なんで俺が選ばれたのかわからなかったが、話を進められたので深追いはしないでおこう。彼女にもプライドぐらいはあるだろうしな。
「勇者か冒険者か旅人の三つからお選びください」
……名前が違うだけでほとんど同じ職業だよな。
名前は選ばせてやると言われているのか？　それとも選ぶ権利がないととっていいのか？
しかし、この三つの中で選べと言われたならすぐに答えは出る。
「とりあえず勇者をやってみようかな」
これが正論だろう。ＲＰＧもののゲームで大抵は勇者だし、冒険者と旅人はほとんどいないからな。
すると彼女は、「わかりました」と短調な返事をして、小型の電子機器を取り出した。
なんだあれ？　手につけていないし、そもそも形が全然違うからＥＩではないな。
新しい電子機器か？　と思っていると、突然目の前の何もない空間から黒い服が落ちてきた。

「素早くそれに着替えてください」
……えーと、服って目の前に落ちてきたやつだよね？　普通の学ランに見えるんだけど。
「なにをしているんですか？　早く目の前の服に着替えてください」
学ランを指差して言っているから、それで間違いないんだろう。でもなんで学ランなんだ？　まぁ、細かい事はいいとしようか。
服に手を伸ばしながらここに来て一番最初に、疑問に思ったことを聞いてみた。
「この床の文字はなんなんだ？」
彼女の話をしているときも、すぐには解読できないこの床の文字が気になっていた。
「それは移動魔方陣の魔法字です」
……魔法字ってなんだ？　聞いたことないぞ。ゲームの中で使われている字なのか？
俺の考えを悟ったのか、彼女は親切に教えてくれた。
「魔法字とは魔方陣に使われる文字のことで、このゲームで使われる字はあなたの世界で一般的に使用される漢字ですので安心して下さい」
この世界の字も漢字で良かった。俺が知らない字だったらクリアに支障が出るかもしれないからな。
さらに俺が服を着替え終わると、
「ちなみに魔方陣とは魔法を使用する際に発動する言わば飾りみたいなものです」
と説明してくれた。
……今何て言った？　魔方陣が魔法を使用する際って……つまり移動魔方陣は移動魔法を発動する飾りって事だよな？
「お気づきになられましたか？　ではまたお会いしましょう」
彼女の声と同時に足元の魔方陣が輝きだした。
「待ってくれ！　まだ聞きたいことがあ」
しかし、意思を持っていない魔法は待ってくれず、俺の身体は宙

を舞い、光に包まれた。

眩しくて目を閉じていたが開けれるほどの明るさになったのでゆっくり開けた。
前は空と緑しか見えないが眼下には小さな村が見える。
……眼下？
「うわっ！！」
気づくと何故か宙に浮いていて、俺の身体は高速の落下運動をしている。
「……って死ぬから！？」
冷静に状況を把握している場合じゃなかった。このまま落下していったら死んでしまう！
えーと……こんな時ってどうしたらいいんだろう！？　こんなシチュエーションねぇよ！　あったとしたらほとんどの確率で死んでるから！
そんなことを考えている内にスピードはどんどん上がっていき、大砲でも使ったかのような大音量を出して俺の身体は叩きつけられた。

大量の草の上に。

……マジで死ぬかと思った。冷や汗が体中から出てくる。心臓の動きも全く止まらない。意外なことに傷一つついてないけど。
よく助かったと思う。普通数十メートルの高さから落ちて助かるどころか傷一つつかないなんてありえないことなのに、それがこの身に起こるなんて奇跡としか言いようがないからな。
「いててっ……。見える傷はないけど、ちょっと身体を打ったみたいだな」

目に見える擦り傷とかはないけど、動くと体中がちょっと痛い。
まぁ、動けなくはないから骨折とかではなかったみたいだ。骨折もしてないなんて……俺の身体は凄いな。
それにしてもここはどこだろう？　んー……木や草が生えていて池があるからどこかの庭だろうか？　それともただの小さな林か森あたりだろうか。
「貴様等、そこで何をしている！」
「……は？」
木々の間から突然現れた、江戸時代の武士を絵に描いたような人が俺に問いかけた。
いや、そこで何してるって言われても……連れてこられたとしか言いようがないしな。でもそれで許してもらえる空気じゃないことぐらいわかる。
次なる俺の言葉を待たず、男はさらに追求してきた。
「どこの者だ！　ここがミーネ様の屋敷と知って入ってきたのか！」
「なんにも知らねぇよ。ここはミーネってやつの屋敷なのか？」
「な、何故ここがミーネ様の屋敷だとわかった！　さてはウェルビナの者だな！！」
こいつアホすぎるだろ。さっき自分で言ってたことに気付いてないし。つーかウェルビナってなんだよ。そこから説明してほしいな。
……ちょっと待て。この男俺と会った時、貴様等って言わなかったか？
「あなたは着地がとてつもなく下手ですね。それにミーネの敷地内に到着するとは……あなたはとても運がないですね」
「なんでいるんだ！　さっき『また会いましょう』って言ったよな！？」
「『また』が何日先や何年先とは言ってませんけど？」
俺の横には会った時と同じ無表情の顔の炎少女（ほのおしょうじょ）が立っていた。音がしなかったから俺と違って着地は成功したんだろう。
着地場所は俺が選んだんじゃないのに。魔法に運とか関係あるん

だな。
　それにこれは一杯食わされたな。次に会うのはクリア後とか思ってた。
「それより危ないですから気をつけてくださいね」
　俺が彼女と会話している間に周りを複数の男に囲まれていた。先ほどの男が仲間を呼んだみたいだ。
　全員綺麗な刀を持ってるし。……クソ、めちゃくちゃ欲しい。
　しかし欲しいとか言ってる場合ではないのですぐに戦えるポーズに体を移動させる。流石に座ったままだと俺でも勝てそうにないからな。
「おい炎少女（ほのおしょうじょ）。こいつらは普通に倒せばいいのか？」
「私は炎少女ではありません。フィリアス・ルートと言います。フィリアスと呼んで下さい。後、普通に倒せばいいとはどうゆう意味ですか？」
「じゃぁ、フィリアス。簡単に言わせてもらうがこいつらは倒すと死ぬタイプか？　それとも消えるタイプか？」
　消えるタイプなら殺してもいいから本気で戦えるが、死ぬタイプなら後味が悪いからな。
　フィリアスは俺の言っている意味がわかったのか親切に教えてくれた。
「あなたは心が優しいですね。しかし、残念なことに死ぬタイプですよ」
「なら気絶か打撲でも与えるかな」
　まぁ、本気を出せないのは残念だけど人を殺すのは好きじゃないから良かった。
　そして、じりじりと迫ってくる男達に俺は地面にあった木の棒を持ち攻撃をしかけた。

俺は守護をやってみた

俺は産まれた時から茶色の髪の毛を持っている。
その髪の色は、幼稚園の頃はカッコいいと言われ俺の周りにたくさんの人が集まるほどだったから良かったが、小学生になりカッコいいから怖いに変わるとみんな俺から離れていった。
学校に行っても居場所がないので授業が終わるとすぐに家に帰る。家に帰っても両親は仕事でいなくて友達なんていなかったから、いつも一人で身体を鍛える。
つまらない。いつしかそれが口癖になるほど毎日一人で鍛えていた。しかし、そのお陰でかなり強くなって、今ではクマでも倒せるほどだ。
だから今目の前にいる刀を持った男達にも負けるはずがない。そう思っていた。
しかし、その考えは甘かった。
最初はその中の一人から刀を奪い優先的に戦っていたが、計算外の事が起きたのだ。
俺が前方の敵と戦っている間にフィリアスが後方の敵に捕まるという事態。
……あいつ全く使えなかった。
そのせいで俺も捕まり、今は屋敷の部屋の一つに、フィリアスと一緒にくくりつけられている。
「いきなりゲームオーバーになりそうですね」
「九割以上お前のせいだけどな！」
フィリアスは捕まってからもいつもの無表情を崩さず冷静にものを言ってくる。
自分のせいで捕まったって自覚してないのか？
「私は戦闘用の人間ではないと忠告したはずですが」
「確かにそんなこと言ってたな。でもな、自分の身ぐらい自分で守

れよ！」
「一般人も守りながら戦えなければ勇者とは言えませんので」
「……旅人と冒険者の場合でもそうなるのか？」
「逃げればいいだけです」
「勇者だけ難易度が高い！？」
「勇者以外は初期装備に聖剣がつきますよ」
「勇者以外がまさかの最強職業！　それに逃げるだけなのに最強装備！？」
「静かにしてください」
「急にダメ出し！？」
　こいつとの会話はかなり疲れる。誰かにツッコミ役を代わってほしい。
「君達が侵入者かな？」
　突然キーの高い声が聞こえたと思うと俺達がいる部屋の壁の一部がパカッと開いて、中から小さい女の子が出てきた。
「初めましてだね、侵入者達。私はレマ・ミーネ・ショコラだよ。ミーネはMと書くが……知っているよね。レマと呼んでくれて構わないよ」
「あなたがミーネ家の次期当主ですね。思っていたより背が小さかったです」
「うるさいわ！　成長期が遅いからまだ身長が伸びていないだけだ！！」
　なんでこいつは思ったことをすぐ口に出すんだろう？　バカなのか？
　それにこの……レマ、だっけ？　は身長こそ小さいが見た目からして俺とさほど変わらないだろう。つまり成長期はそんなに遅くないと思う。
「時にそこの男。先ほど戦った部下どもが言っていたのだが、なかなか強いそうだな」
　そこの男とは俺のことだろうか？　まぁ、この部屋に男は俺だけ

だからそうだろう。
「弱くはないがそれがどうした？」
すると小さい姫、略してチビ姫はニヤッと笑い、俺の目の前に刀をつきだしてきた。
「なんね真似だこれは？」
「この刀を使って私を守護しないか？」
チビ姫が鞘から刀身を出すとその刀は弱い紅蓮の炎を帯びていた。
これは、うん、めちゃくちゃカッコいいし欲しい。
「この刀は……『紅姫（べにひめ）』ですね。しかしそれはミーネ家の家宝であり、妖刀ではないですか？」
途中から会話に参加していなかったフィリアスが身を乗り出して説明してくれた。
「口うるさいだけじゃないのだな。その女の言う通り、これは妖刀『紅姫（べにひめ）』と言って我が家の家宝だ」
妖刀ってあれじゃないか？　装備したら呪われる的な。あー、なんか嫌だな。
「そんなに嫌な顔をしなくてもよいだろうに……。妖刀と言ってもそなたのイメージとは多分違うと思うよ」
無意識のうちに顔に出ていたみたいだ。
気まずい空気になったので話題を変えてみた。
「なんで俺なんだ？　ここにも強いやつぐらいいるだろ？」
なんで俺がチビ姫のお守（も）りをしなきゃならないんだ？
するとチビ姫は暗い顔をして俯いてしまった。聞いたらいけないことだったのか？
「ヴェルビナって知っているかな？」
「あー、なんかお前の部下が言ってた気がする」
友好関係は良くないようだが。強いて言うならヘビとマングース。
「ヴェルビナは私達の敵なのだ。父上はそいつらに人員を使って私に護衛をつけてくれず、この間も私はそいつらに殺されそうになったのだ。そいつらに手一杯でもう私のことは見えてないのだろうか

……」
「殺されそうになったのに護衛をつけてくれないとは、あなた見離さむぐっ……」
フィリアスがまた無意識に毒舌を吐こうとしたので手で彼女の口を塞いだ。
……あれ？　手が使える？
ふと体を見ると縛っていた縄がほどけて床に落ちている。いや、ほどけているんじゃない。切断されている。
「あぁ、その縄は私が今斬ったよ」
彼女の手にあった紅姫の刀身の方は俺達に紅蓮の炎を見せていた。縄を見ると切れ目にじゃっかんだが焦げ目がついている。焼ききった証拠だ。
「あなたの職業とレベルを教えてくれませんか？」
「私の職業はでレベルは１３だよ」
ピコーンと不適切な音がしたと思うとチビ姫の頭上に四角いなにかが出現した。
「なんだそれは？」
チビ姫の説明より先にフィリアスが答えてくれた。
「説明していませんでしたね。それは能力値（ステータスウィンド）と言ってその人のレベルを見たり、防御力や腕力、すなわち攻撃力などを見ることができます」
「どうやって出したんだ？」
「心の中で出ろ、と思うとでてきますよ」
またピコーンという音がして、今度はフィリアスの頭上にステータスウィンドが出てきた。
レベルは……２８！！　チビ姫もビックリしているから多分凄いんだろう。
なんかステータスウィンドを見たら俺が本当にゲームの世界に来たっていうのが実感できる。
でも残念だな。チビ姫のステータスウィンドを見ても凄いかどう

かわからない。いや、俺も自分のステータスウィンドを開けばいいのか！　でもどうせレベル１だろう。この世界に来たばかりだし。
そう思って遊び感覚で出ろ、と思うと先ほどの音がして俺の頭上にも出てきた。
でも……真上に出てきたから、下からははっきり言って見にくい。
「え……。　こ、こんなの尋常じゃないよ！！」
「これは凄いですね。こんな数値初めて見たかもしれません。やはり逸材でした」
チビ姫は驚き、フィリアスも俺を褒めている。……なんで？
「おーい、なんで驚いてんだ？」
するとチビ姫が、興奮しているのか早口で言ってきた。
「そなたのレベルが５１なのだ！！」
「……はぁ！？」

俺は作戦をねってみた

「レベルが５１だって！？　あり得ねぇだろ！　俺はさっき始めたばっかだぞ！」
もう無茶苦茶じゃねぇか！　バグってんじゃないだろうな？
もしかして庭で戦った時かなりレベルアップしたとか？　十人中五人倒したから……一人倒す度に十レベも上がってたのか！？
……それじゃなかったら完全にチートだな。
「さっき始めたばかり？　そなたはなにを言っているのだ？」
「あなたのパラメーターやレベルは、元の世界にいたときの強さをこの世界に変換したものです。それにしても……凄いですね。スーパー〇〇〇ジンみたいです」
誰がスーパー〇〇〇ジンだ。俺は普通の日本人だぞ。
「俺って案外強かったんだな」
フィリアスより強かったのはめちゃくちゃ意外だ。
「私も話に加えてくれぬか？」
チビ姫が涙目で訴えてくる。なんで涙目なのかわからないし、言ってもわからないと思うんだけど……。
「この男はこの世界の住人ではありません」
「目の前で個人情報が流出してる！」
「どうゆう事なのだ？」
「説明しにくいんですが……」
「こちらにいらしたんですか姫！」
と、そこで俺達の会話を終わらせるように一人の男がドアから入ってきた。チビ姫とは違い、きちんとドアから入ってきたところは偉いと思う。
「藤野丸（ふじのまる）、どうしたのだ？」
藤野丸と呼ばれた男はチビ姫の言葉を無視し、慌ててチビ姫の下まで来て、手を取り無理矢理連れ出した。

急な事だったので、手を引っ張られた時チビ姫が落とした『紅姫（べにひめ）』を拾い、フィリアスと共に二人を追いかけた。

各地からバンッ、バンッと銃声が聞こえてくる。まさか内戦でもしているんだろうか？　俺達の身も危ないぞ。

「今はヴェルビナの軍が攻めこんできていて混戦状態です」

藤野丸（ふじのまる）さんの話によると、先ほど出てきたヴェルビナの軍隊が今居る屋敷に攻めこんできたみたいだ。

本当に今日は不運だな。イマジ○○○イカーを持っているのかもしれない。

「こちらです」

そう言われて門をくぐるとそこはなにもない広い土地だった。

「どういうことなのだ、藤野丸」

振り返ると今くぐった門が閉じられていた。……追い出された？

「ここを開けるのだ！　これは命令だぞ！！」

さっきまでの落ち着いたら声ではなく荒々しい声を出しながらドンッ、ドンッ、と門を叩く。

チビ姫は焦っているようにみえる。当たり前か、追い出されたんだから。

多分こいつはわかってないんだろうな。

チビ姫を落ち着かせるために門に近づいてみると、門の向こう側から小さな声で何かが聞こえてきた。

「すみません、姫。これはあなたのお父様の意思です」

その言葉はチビ姫の胸に鋭く突き刺さった。自分の父親からいらないって言われたのと同じことだからな。

俺でも耐えられないと思う。……まぁ、既に両親いないんだけど。

「う、嘘だ。お父様がそんなこと言うわけがない」

「なら自分で聞いてみたらどうですか？　もっとも、そんなことは

できないですが」
……なんでだろう。怒りが込み上げてくる。
親父とかが生きてるとき俺も勉強せずに遊んでいたらよく言われたんだよな。
「お前は勉強していないといらないんだよ」ってな。
だからなのかな、めちゃくちゃ腹が立つ。こんな門壊したいぐらいに。
「あなたはなにもしてはいけません。他にやらなければならないことがあるようです」
今まで静かだったフィリアスが指で示した方角には……黒い点がいくつも見える。
いや、違うな。あれは人だ。それも二百以上は見える。
「あれはヴェルビナの援軍でしょう。ここら辺にはこの屋敷の軍隊とヴェルビナの軍隊しかいないですから」
俺はチビ姫の親父の考えがわかった気がした。
おかしいと思ったんだ。今チビ姫を追い出してもヴェルビナと戦うために軍を送れば必ず門を開く。そしたらチビ姫は簡単に中に入ることができる。
つまりヴェルビナにチビ姫を倒させて、それからここで戦(いくさ)をするつもりだな。
「チビ姫、もう無駄だ」
「チ、チビ言うなぁ……ぐすっ」
先ほどからずっとドアを叩いていたチビ姫の手を押さえる。
お前はなにも悪くない。ただちょっと運が悪かっただけだ。
でもここで殺されるのをただ待ってるのも、それはそれで癪(しゃく)だよな。
「フィリアス、敵のレベルとかわかったりしないか？」
「私(わたくし)の眼で見える範囲は弱いですがレベルが二十を越えるものはいないですね」
「ありがとう」

フィリアスはわかっていたのか既に調べていてくれた。
それに一目で敵のレベルがわかるなんて……その眼が欲しい。
……俺、フィリアスと仲良くなってきてないか？　これがエロゲーなら、このままいくとフィリアスルートに入りそうだ。
「さてと……頼むぜ紅姫（べにひめ）」
先ほど拾った妖刀『紅姫』を鞘から出し、呟く。
刀身からは先ほどより神々しい紅蓮の炎が渦を巻くように出てきている。まるで俺の言葉に反応しているみたいだ。
今までのゲームからすると、敵の大将的人物を倒せば一旦は引いてくれるだろうからその作戦でいくことにした。
使ったことがないからわからないが強そうな刀である妖刀『紅姫』に、援護のフィリアスとチビ姫をつければ、敵の数が二百あっても多分死なないだろう。
なんたって俺はレベル５１の勇者だからな。
しかし俺は自分がいくら相手より強くても油断はしない。よくあるだろ？　油断して負けるラスボスとか。
「な、何をするつもりなのだ？！　勝てるはずがないのだよ！」
「勝てねぇなんて誰が決めたんだ？　神様か？　そんなもんより自分を信じればいいんだよ」
気がついたら漫画の主人公が言いそうな台詞を吐いていた。いや、マジでよくこんな台詞言えたな。言ってから恥ずかしくなってきた。
「ヒューヒュー、カッコいいですね」
小学生低学年が言いそうな台詞を棒読みで言ってきたフィリアスは軽くスルーして、だんだん近づいてきている敵を倒すことに集中する。
距離は……百メートルくらいだろう。数は二百人ぐらいいるがレベルからしてそう強くはない。
「一番レベルが高いやつはどいつだ？」
「それも既に調べています。最後尾のイヤリングをつけていて斧を持っている男です」

本当にその眼いいよな。百メートル近く離れているのに最後尾にいる人間がイヤリングをつけているかどうかわかるなんて。
「最後尾にいるやつにどうやって近づこうかな」
「私の空間転移魔法を使いましょうか？」
「いや、それを使うとこの屋敷がやられる」
それに俺だけを移動したら大将と何人かだけ俺と戦うことになる。残りの百以上はフィリアスとチビ姫だけで戦わなければならない。長引けば二人では耐えきれないだろう。
俺とフィリアスとチビ姫を移動させたら屋敷の前はがら空きになってしまうからそれも駄目だ。
「お父様達……いや、屋敷の人間は私たちを殺そうとしたのだぞ？屋敷などほっとけばよいではないか！」
「悪いなチビ姫。そういう訳にはいかないんだ。なんたって俺は、勇者だからな！」
めちゃくちゃきまった！　これで、
「しかしどうするんですか？　勝てる方法でもあるんですか？」
……もうちょっとカッコつけさせてくれてもいいんじゃないかなー、フィリアスさん。
「まぁ、一応一つはあるけど」
「……一応、聞いておきましょう」
「俺が単体で突っ込んでいく！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4406w/

楽園に送られた俺はとりあえず勇者をやってみた

2011年10月3日03時39分発行